

酪農肉用牛部が行っている研究の進捗状況

畜産試験場

潜在的なSARA(ルーメンアシドーシス)を防止するための 飼養管理技術の開発に着手！

反芻動物である乳牛は、不適切な飼料給与によりルーメン（第一胃）での発酵異常が起こりやすく、潜在的に第一胃内が酸性化するSARA（ルーメンアシドーシス）の多発が指摘されています。近年、乳牛は遺伝的な改良により20年前と比べ1.5倍の乳量を生産できるようになりましたが、この乳量の増加は、穀物などの濃厚飼料の多給によって支えられています。こうした高泌乳牛では分娩後に乳量が急激に増大するため、濃厚飼料の給与量もこれに合わせ増加せざるを得ません。この濃厚飼料の多給が、SARA発生の一因と考えられています。

SARAが日常的に発生すると、消化障害、肝機能障害、蹄病などの発生を引き起こし、乳量や乳成分の低下など、生産性を阻害するとされています。SARAの防止対策を研究するためには、ルーメンのpHを連続的に測定する必要があります。これまではその手法が確立されていなかったため、SARAの実態は不明でしたが、最近ルーメン内に留置する、留置型・無線伝送式pHセンサーが開発されました。そこで、このセンサーを用い、本年度から粗飼料や濃厚飼料の給与方法、機能性飼料の給与などにより、SARAの発生を低減できる飼養管理モデルの確立に取り組んでいます。



牛の第一胃内に無線伝送式pHセンサー留置し、
飼料給与条件の違いによるルーメンpHの変化をモニタリングしている様子

担当者	松浦 昌平	電話番号	0 2 6 3 - 5 2 - 1 1 8 8
-----	-------	------	-------------------------

[試験場だより 442 号へ](#)

[畜産試験場ホームページへ](#)